

# ふるさと “風”

第五十号 (二〇一〇年七月)

風に吹かれて (30)

白井啓治

『五月雨は笹ゆりの香に染まり 老女逝く』

ことは座第18回公演の中日が終了した夜の事、母の死の知らせが来た。形式だけとはいえキリスト教徒の私がこんな言い方をするのはおかしいことではあるが、昨年の暮れに母を見舞いながら「引導」を渡して来たので気持ち騒いだり、乱れたりするものはなかった。満95歳の人生であった。火葬・告別式は公演の終了後に行ったのであったが、教会の限られた姉弟達と家族だけの静かなものであった。命を精一杯に生きた母には相応しく悲しみのない、この世に生を受けた者の当然の帰結としての告別であった。

火葬前の母の棺は、季節柄ではあったが、白いユリの花が多く、強い花の香を聞きながら、少年の頃、梅雨にびしょ濡れになりながら母を喜ばそうと裏山の笹ゆりを一抱えも摘んできた事を思い出した。

白いユリの花に埋もれた母の姿は、余りにも静穏であった。なるほどこれが人の死、生命の消して鼓動の止まった様なのかと、感動を覚えた。これもまたキリスト教徒としては不謹慎であるが、生なく滅びなし、とはこの一瞬を表現して言うの

かもしれないと思った。

今ももう教会に行く事もないが、昔、熱心ではなかったが時間をもてあました時に、ふらりと教会に行っていた頃のことである。私の、若いキリスト教信者としては決して許せない様な過激な言動に、『白井君はキリスト教徒ではない。〇〇子さん目当てで来ているのよ、いやらしい』と非難をされた事があった。しかし、私はそんな事にめげる程繊細な神経ではなかった。『馬鹿言え。ランボーだってジュネだってキリスト信者だったんだぜ』と嘯いていた。私を非難の目で見る女学生たちは、私が伝道師であり医者であった家に生まれ聖書の中で育った事を知らなかったし、言う事もなかった。

『疲れたら休めと野の花のいふ』

石岡に来て間もなく詠んだ一行文詩であるが、母への引導もこの詩の延長線上といえるものであった。

引導などという言葉は、仏教語そのものではないが、しかし、今では日本語としての表現語である。元はインドの梵語(サンスクリット)が、漢語に翻訳され、その漢文が日本語化して今に至っているのだからもう立派な日本語である。キリスト教の聖書だって、古代へブライ語から英語・仏

## ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会もお陰様で五年目に入りました。当会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に勉強会を行っております。

〇会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063

田田昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com>

語…そして日本語へと翻訳され、日本人の經典としてのバイブルになっている。コーランは親しんだことが無いので解らないが、日本語訳されたものはやはり日本のコーランになっているのだろうと思う。日本語訳されている聖書も現代解釈されている經典も同じ日本の臭いがする。横道にそれだが、鼓動の消した母の顔は、矢張り静穏で「生なく滅びなし」と表現すべきものであった。そして、それは95歳まで生きた自信とも言える静穏さであったと思う。

京都の知人が主催する『総合文芸誌 まほろば』が届き、追いかけるように明日香村等主催の『まほろば講座』の案内が来た。

この「まほろば」に関しては、『古事記』に「ヤマトハクニノマホロバ」、『日本書紀』に「ヤマトハクニノマホラマ」、『万葉集』では「クニノマホラ」とある。いずれも「国の」とセットになっている。語尾に転音はあるが意味は同じで、国語辞典には、「すぐれたよい所。一説に、山や丘などに囲まれた所」とあった。普通は「ヤマト(奈良盆地)」はヤマトの国の中心」ということで、奈良市は奈良県の中心というほどの意味かと思われる。

それに対して、奈良王朝から常陸国の役人として派遣されていた高橋虫麻呂が、検税使として赴任した大伴旅人を筑波山に案内して詠んだ歌(万葉集一七五三)では、常陸国府一帯を指して「マホラ」としている。あなたが登ってきたので、雲がかかった筑波の山はすっきりと姿を現し、ぼんやりとして見えなかった「国のまほらを つばらかに(まびらかに)の意 示したまへば うれし」いかぎりです。というのが大意。そこでは儀礼的な歓迎のあいさつ、国自慢、常陸国府誉め、さまざまな情報が発信されていたようだ。

国府はコクフともコウとも言う。コクフと呼んだのを聞いてそれに石阜(コクフ)を当て字したところ石阜(イシウカ)と読まれ、石岡と書かれるに至った。またコウという呼び方から国府(コウ)の浜が高浜(コウノハマ)と書かれ高浜(タカハマ)が定着した。かつて、このようなことを『常総の歴史』(書房)に書かせていただいた。そのようなこと

から、石岡の市名を「常陸国府」に替える動きに賛同したことがある。このたびの市町村合併にあたり、それが再燃し、賛同を求められたが、お断りした。対等合併の広域自治体名にふさわしくないと考えたからだ。そして、この地域は地理的に茨城県のマホラ、歴史的に常陸の国のマホラであったから、新市名には「まほら市」として応募した。格調が高いが知名度は低い。それに発音に違和感があるなど、もちろん採用されるとは全く思わなかった。広域合併はその後ご破算になり、石岡はその市名のまま八郷と合併し、三町村は平等に頭文字を採り新市名として一件落着。

そのような動きのなかでしきりに思い出されたのが、半世紀前の、隣接県「いわき市」の誕生である。古くは磐城国と言ったそこに磐城郡ができ、後に石城(いわき郡)。その三町・三村。双葉郡の一町・一村。それに平・磐城・勿来・常磐・内郷の各市が合併した。磐城市は磐城、石城郡関係は石城、城下町の平、産業や歌枕の各市それぞれ主体性を主張しあつたことが想像される。最後は歴史的地名をとり、石城・磐城どちらにも公平に「いわき」市となったが、それにはオチがつく。聖徳太子制定の十七条憲法に「和を以つて貴しとなす」とあるとおり、前代未聞のそれぞれ個性が強い十三市町村の合併にはまずは「和」が大切。「和を以つて貴し」すなわち「以和貴(イワキ)」である。しかし、これでは読みにくいから、かな書きにしよう。しかし、そのかな市名のいみは「以和貴」であることを全市民で共有しようということで、おそらく満場一致だったろう。すばらしい発想だ。

環境が意識を決定すると言う。自治体名も環境であり、「いわき市」のみなさんは和を大切にしてい

いるに違いない。また、例えば施設名も環境であり、多摩川の畔に「タマリバー」(多摩リバー・溜まり場)という複合福祉施設ができたという。活性化が目に見えるようである。アイディアのあるネーミングをさまざまな場に提案することで地域の活性化に役立つことができるのではなからうか。

### 晴耕雨眠

菅原茂美

とにかく、世の中はセツカチ過ぎる。もう少しゆつくり、穏やかに過ごせないものだろうか。

産業革命以降、機械文明の急速な発展が、今日の寸秒を争う、セツカチ社会を生み出した。

自分が生きるに足る、最小限の衣食住が確保されれば、それで御の字ではないのか。暖衣飽食で、豪邸に住まなくとも、その日が人並みに暮らせれば、文句はないはず。それが欲望には際限なく、贅の限りを尽くす。その結果が緑の惑星を砂漠化し、見るに堪えない姿に変えつつある。

生活のためには、多少は働かなければなるまい。晴れた日には田畑を耕し、最低限の生活の根拠は確保せねばなるまい。気候変動や自然災害もあるから、多少は蓄えも必要であろう。しかし、急速に膨らんだ大脳は、強欲を突っ張り、できるだけ労少なくして多くの実りを期待する。それが昂じて窃盗・強奪へとエスカレートし、ついには他国をも侵略する。それが人類の歩んできた歴史だ。浅ましき限りである。宗教で「博愛」など唱えても、人類はそんな温厚な動物ではない。

ではどうすればよいか？ 人類が救われる最善の方法は、生活のスタイルをスローに転換することだ。文明のスピードを緩めることだ。晴れたら耕し、雨なら読書ではなく、ゆっくり寝て暮らす。頑張りすぎない。のろま・ぐうたらは地球を救う。あまりにも切磋琢磨・勤勉居士では、二宮金次郎さんも、精根尽き果て、倒れてしまう。能天気の小原庄助さんあたりが、丁度良い生活ペース。(私の願望するこの優柔不断な態度が、サッカーで日本が韓国に勝てない理由かな?)。自然を破壊しない。資源を浪費しない。これが人類滅亡を防ぐ、最善の手段である。

さて世の中は、右肩上がりの「経済至上主義」。これが今日、世界の諸悪の根源だと私は考える。経済成長第一主義者にとって、私の主張など夢想家のタワゴトぐらいにしか受け取らないであろうが、全世界の誰もかれもが、とにかく経済の発展、GDPの一層の伸びを期待する。もしその伸びが、微小だったりマイナスだったりしようものなら、社会は一斉に為政者を無能呼ばわりする。しかし、私はそのような政治家がいたら、むしろ英雄として称賛したい。ゼロ成長ならご立派。地球上の限られた資源を我先に使えば、我々の子孫が使う分など眼中になく、今の今、オレが政権を持っている間だけは、何が何でも経済成長しなければ…と躍起になる。それがいけない。経済発展には必ず、所得の格差を生じる。世界の至る所に軋みを生じ、廃棄物や環境汚染に伴う。効率的経営を狙い、過労死を招くなど許される事ではない。物質文明の異常発展は、地球の著しい劣化を招く。地球の再生能力を超えれば、惨憺たる末路が待っている。資源の浪費は枯渇あるのみ。

その結果が戦争を招き、更に環境破壊は、生物の多様性を減じ、将来、我々の子孫の安全な生存を脅かす。コントロール無き経済発展は、環境汚染・地球温暖化をもたらし、それが悲劇的な結果を招くと、科学者達は、はっきりと宣言している。

一体この限られた資源で、どこまで経済発展したら満足するというのであるか？ 個人や会社が、むやみやたらと「富」の蓄積に走り、それが土蔵一杯になったからと言って、一体なんだというの？ 一方では、餓死者もいれば、労働を強要され、身も心も疲れ果て、自殺者数のみウナギ昇り。社会正義など絵に描いた餅。地方は過疎に苦しみ、都会だけは不夜城の賑わいだ。

政治家や高級官僚は、未来への展望をどう考えているのであろうか。選良とは名ばかり。国会風景は、審議拒否などまるで衆愚の罵り合い。衆議院ではなく「衆愚院」だ。国家百年の計などどこ吹く風。最もそんな衆愚を選んだのは誰だ？ と問われると振り上げたゲンコツのやり場に困る。

【とにかくここは、挙国体制を取るべきだ。衆参両院をまとめて一院でよい。国会議員の数は、2〜3分の1に減らし、まず報酬を引き下げる。そして借金という未曾有の困難に率先対応。議員がまずリストラをし、範を垂れるべきである。】  
一方、頭のいい官僚は、政治家を口説き、怪しげな法律をバックに、自分が天下る組織をマンマと作り上げる。国から巨大な委託費や補助金を流すシステムをガッチリ構築する。自分はそのに居座り、巨万の報酬を掠め取る。

キャリア組など、選抜試験方法がそもそも間違っている。偏差値で国家は治まらない。国民生活の現場を知らない、温室育ちの官僚に、血のにじ

むような庶民の暮らしなど分かるまい。民生委員のオバサンあたりが、厚労省の高級官僚にでもなれば、もつと血の通った行政ができるだろう。

そもそも日本の民主主義は、国民が何としてもそれが欲しくて、血を流して勝ち取った宝物ではない。憲法も市民革命で作ったものではない。戦争に負けて、ただで貰った土産のようなもの。それゆえ、その本当の有難さを知らない。片や自由主義は、「自分勝手」とハキ違えている。国の将来を考えたら、事業仕訳など朝飯前の発想で、借金で苦しいのなら、ステーキは諦め、お茶づけで耐える時もあるであろう。しかし、日本の為政者だけが特別に無能なわけではない。全世界が百年先、千年先の事を考え、環境保全や、資源の無駄遣いを抑える長期展望に心を砕いているとは思えない。地球の限られた資源は分捕り合戦。毎年世界人口は八千万人も増えている。その衣食住を確保するために経済戦争や、内乱が処処に勃発。

【1800年に10億人だった世界人口は、今や70億人になろうとしている。ここ50年間で人口は2倍になり、食糧と淡水消費量は3倍になり、化石燃料消費量は4倍になった…と言われる。】

資源減少で最近問題になっているのは、植物の3大栄養素の一つ「リン」である。窒素は無尽蔵にあり、カリは当分心配ない。しかしリンだけは底をつきそうだという。一方、人体には、骨や、DNAの構成元素などとして65gのリンが存在するが、それを維持するためには、毎日1gを摂取し続けなければならない。そのためには、一人一日当たり肥料として、22.5kgのリン鉱石採掘が必要。ところが現在世界のリン鉱石埋蔵量は1630億トしかなく、カドミウム・ヒ素混入や深海底・高深

度地下など、採算ベースを考えると、利用可能なのはその10%程度。しかもリン資源は中国・モロッコ・南アフリカなどに偏在。現状の使用量だと、あと90年しか持たないという。そして近年はバイオ燃料のためや、発展途上国でのカロリー摂取量漸増などで、一層肥料としてのリン不足が予想される。経済発展→高カロリー摂取→資源不足は、中学生でも推測できる論理だ。世界の為政者は、そんなこと気にはしていない。今の今、オレが政権を保持している間だけ、国民が豊かになり、暴動など起きなければそれでよし。どうやらこれが万国共通の、スーダラ節的世界風潮だ。

人類の末永い繁栄を願うのなら、もつともつと生活のレベルをスローダウンし、諸々のスピードを落とさなければならぬ。移動手段の高速化、ハイレベルの消費生活、不健康なまでの高カロリー摂取。これらは、人類の「種としての寿命」を一途に短縮させるものだ。もし人類に智慧というものがあるのなら、全世界が早々にそのことに気づき、生活態度を早急に改める必要がある。

さて気がかりなのは、地球温暖化に関する件だ。少々細かい数字の羅列で恐縮だが、地球温暖化に関する基本的な数字はこういうことだ。氷河期と温暖期の温度差は、5℃以内である。一方、産業革命以前（1760年）より、気温が2℃以上上昇すれば、悲劇的な結果をもたらすと言われている。現状は、この100年間で、すでに0.74℃も上昇している。そして産業革命以前の大気中のCO<sub>2</sub>濃度は、280ppmであったが、現在は387ppmである（地球環境が一応安全な限界は、「350ppm」と言われる）。2℃上昇に相当するCO<sub>2</sub>濃度は、450ppmなので、その差、63ppmを、毎年増加している2ppmで割ると、あと32年しか持たない。

即ち、現状のCO<sub>2</sub>排出量だと、2042年には、確実に悲惨な状態になるといわれる2℃上昇に達してしまう。その恐ろしい状態が、何千年も先の話ではなく、わずか32年先のことである。

一方、2050年ごろ、大気中のCO<sub>2</sub>総量は、1兆トと考えられ、2℃上昇以内に止まるためには、毎年CO<sub>2</sub>排出量を、2.5%ずつ減らしていかなければならないという計算になるのだという。

では、温暖化の恐怖とは、どういうことか？

まず、海水面の上昇である。極地や高山の氷河が溶ければ、海水面が上昇する。海水温は当然上昇し、膨張する。更に産業拡大による汚染した大気は酸性雨となり、海水の酸性度が増し、サンゴの白化や、生態系の破壊・食物連鎖がくずれ。そして、海水や大気中の酸素濃度を減じ、酸欠を招き、生物の大量絶滅に繋がる。過去5億年間に、生物のほぼ90%が絶滅する事件が5回もあった。今、人類は無計画な経済発展により、地球環境を汚染し、第6回目の破滅を、自らの手で招こうとしている。

【人為によらない温暖化の最も身近な例は、今から6000年前、霞ヶ浦の水面は今より7メートル高かったといわれる。波付岩辺りまで、海は来ていた。それが人為により強烈な温暖化を招けば、ツバルなど低地の国は、忽ち浸水の危機にさらされる。関東平野も、海岸線は、ずっと内陸まで侵入するであろう。】

地球は歴史上、海底に沈んだ幻の都市もあれば、ヒマラヤ山頂付近に貝殻の化石があったりし、大陸が分離したり、合体したり、沈下や隆起を繰り返してきた。また、砂漠化やオアシス化を繰り返し、想像を絶する激動を繰り返してきた。

さて、逆に寒冷化に関しては、日本が縄文時代を迎える直前の、今から1万5000年前には、最後の氷河

期で、海水面は今より90メートル低かった。ベーリング海峡は、現水深70メートルなので、シベリアからモンゴロイドは、悠々陸橋を渡り、マンモスなどを追って、アラスカへと渡り、米大陸へ進出できた。

【今から2万年前の最終氷期の最寒期には、海水面は今より120メートルも低かった。日本列島も津軽海峡の一部、宗谷海峡、瀬戸内海の大部分が陸続きで、アジア大陸とも繋がっていた。そして日本海は「塩湖」であった。また、現生人類ホモサピエンスの祖先達は、「遙かなる旅路」の果て、陸続きのアジアの東端、日本列島へと辿り着き、縄文人の祖先となる。一方、インドネシアやフィリッピンなどの諸島が、インドシナ半島と陸続き（スンダランド）になっていたので、ミクロネシアやオーストラリアへの移動は、島伝いに可能であったと言われている。】

私は単細胞で、氷河期などの話が出れば、では、なぜ地球はそんな氷河期や温暖期を繰り返すのか。それを明確にしないと、前に進めなくなる。

一般的には、①地球の公転軌道の離心率が、93,408年周期で、円軌道がゆがむ。②地球の公転軌道に対する地軸の傾きが41,000年の周期で変化する。（22.5度、現在は23.4度）。③歳差運動が29,520年の周期で変化すると言われる。

以上3点のほかに、近年は、①太陽系は、天の川銀河の中心から伸びる腕の末端に位置し、およそ、3億年かけて銀河を1周する。その間、恒星間に散らばる「ちり」の中を突進するわけで、その濃淡により、環境が変わり、地球の気候に変化を与える。②プレートテクトニクス理論によると地球表面は、大陸の分離や合体など繰り返すが、その際、火山噴火やマグマの噴出により、大量の温室効果ガスが噴出し、気候を変動させる。③そして、先に述べた離

心率、地軸の傾き、歳差運動などは、火星と木星の中間に存在する大小様々の小惑星などが軌道を外れ地球に接近した時、地球の公転軌道に大きな変動を与える。それが、氷河期や温暖期をもたらす…などが新たに唱えられている。このように、地球に気候変動をもたらす要因は複雑に絡み合っている。

【月の起原…地球ができて1億年後、即ち今から35億年前、ほぼ火星大の小惑星が地球に斜めに衝突してきた。小惑星は、地球に合体することなく、かすめて飛び去り、地球表面の多くの物質を持ち去った。しかし、地球の引力圏を脱出することなく、地球を周る衛星「月」として周回することになる。又、今から6500万年前、直径10kmの小惑星が中米ユカタン半島に衝突して、恐竜は滅亡した。このように、小惑星など、招かれざる客は、しばしばやってきて、地球環境を破壊し、公転軌道を攪乱する。】

教科書には、大抵10〜20年以上定説として安定した学説のみが載っているが、現代の科学は、日進月歩で、月刊科学雑誌を毎月、キチンと読みこなしていかなないと、時代遅れとなる。余談になるが、私は、2年ぐらい前、最新の学会報告から、DNA鑑定の結果、ネアンデルタール人と、我々ホモサピエンスとの間に、混血はなかったらしいと書いたが、今年になって、鑑定技術の向上などにより、両者に混血があったと発表された。学者間の先陣争いもあるが、何を信じてよいやら…。

さて地球温暖化による弊害の第二は、マラリアなど熱帯病が、中緯度地帯にも蔓延する恐怖である。熱帯に生息する媒介昆虫などが、中緯度でも棲息可能となるからだ。人類の大多数が生活する中緯度地帯の人間は、熱帯病に対する抵抗性はほとんどない。日本人など一コロだ。しかし、私が滞在した中米熱

帯地方の労働者は、日給月給のせいもあるが、マラリアによる39℃近い熱では、殆ど休まず、普通に仕事をしていた。その他、猛毒の節足動物や毒ヘビなど考えただけでも恐怖である。マラリアの他にも、恐ろしい熱帯病は数えきれないほどある。経済の発展こそ第一、持続可能な全く無視。ただひたすらに成長のみを企む。世界共通の思慮浅き政策は、このように悲劇的な結果を招くことは必定である。

そこで私が推奨したいのは、「スローライフ」。経済はホドホドでよろしい。以前にも書いたが、多忙という字は、読んで字のとおり、多くの心を亡くすこと。折角この世に生を受け、同じ80年を暮らすのなら、もう少し心にゆとりを持ち、汲汲セカセカの生活からは脱却したいものだ。

近年、都会の喧騒を嫌い、山里に移住してくる人もかなり見える。自分の食べるものは自分で作る。少々の田畑を耕し、自分の住む家もログハウスやら、茅葺屋根の土壁造り。五右衛門風呂に「かまど」で煮焚き。山菜や川魚に、鶏卵とヤギの乳でもあれば、栄養満点だ。腹八分に医者いらす。

涎（よだれ）の多い赤ちゃんは、よく育つ。会話や笑いの多い大人も唾液分泌が増し、健康増進。談笑効果だ。動物も唾液で傷を治す。一方仕事などで緊張の多い大人は、唾液の分泌が著しく減少し、消化不良や、胃のトラブルを引き起こす。緊張は諍いを産み、業績も低下する。緊張緩和・無駄に見えるのんびりの積み重ね…それが幸福・平和を招く。

経済成長はするな、財政は立て直せ…こんな矛盾だらけでは、私も「頓珍漢院安本居士」の戒名をもらいそうだが、人類の早期滅亡を防ぐためには、どうしてもスローライフを取り戻す必要がある。仲間と語り合い、歌って踊って秋には収穫を祝い、

神に感謝してささやかに祭りに催す。一寸前まで、どこでも行われていたことが今「ふるさと」から消えつつある。それも成果主義のなれの果てか？皆で談笑も良いが、人生の終末期は、仙人生活もまた魅力。没我の境地で沈黙黙考。私も、もう少し若かったら、浮世のしがらみを捨て、さつさと深山幽谷に潜り込み、仙人さながらの生活を送りたい。そして、アントラーズが勝った知らせを受けたら、森の動物たちと、祝杯をあげたい。

## ギター文化館

### 2010 CONCERT SERIES

- 7月25日(日) PM3:00~小川由美子&森万由美オカリナとアルパのコンサート
- 7月31日(日) PM3:00~SONOROSA と仲間たち
- 8月8日(日) PM3:00~高橋行進VS森朗 ジャズライブ
- 8月22日(日) PM3:00~佐藤純一VSタケオ・サトウ ジョイントコンサート
- 9月12日(日) PM3:00~村治奏一ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35  
☎ 0299-46-2457  
Fax 0299-46-2628

## 六月公演を振り返って

小林幸枝

ことば座第二ステージの六月公演は、十八日〜二十日までの三日間行われた。三日間の公演は前にも行ったことがありましたが、同じ演目を三日間やるのは今回が初めてでした。

舞演技は毎日同じでいいのだろうか、もし三日間連続して見に来てくれる人がいたら同じ舞演技では面白くないのではないかなど色々考えてしまいました。先生からは、「完璧と思える演技なんか一生かかってもできないし、毎日の演技に必ず反省点が出てきて、翌日はそれを修正しながら演じていると、また新しい課題が出てきて、それは永遠に続きます。舞台で演技するというのは、舞台という世界に生活する事、生きる事なんです。だから毎日同じことをやっている様でも、絶対に同じではないのです」と言われていましたが、やはり心配でした。でも三日間やってみて、その事が良くわかりました。

三日間観てくださった方もおりましたが、毎日会場の人の雰囲気が変わります。当たり前のことですが、会場の雰囲気が変わると、私の物語を感じる感じ方も違ってきて、昨日の反省点を修正する事も忘れてしまう程、今日の舞演技に集中してしまいました。同じ舞台を千回も続けている俳優さんもおりますが、そういう俳優さんもきつと昨日と同じ演技をしたという事はないのだという事が解りました。

外国では、何十年も同じ演目の舞台をやっていますが、マンネリになる事は絶対にならないのだという事が解り、またお客さんも今日の俳優さんの演技はどうなのだろうか、何度も楽しみに来られ

るのだと思いました。

昨日とは違う観客の中で自分でも計算できない舞が演じられ、お客さんから本物のプロになりました、と言われとても感激しました。

嬉しかったのは、舞のドレスが良かったですよ、と言われた事でした。実は、本番前日の通し稽古の時、インドのサリー調に作ってみたドレスが良くなくて、先生と相談し、調整がうまくいかなかったら白のスラックスとブラウスにしましょう、となったのですがその夜、母と相談し必死に作り直して間に合った衣装だったのです。

石岡の龍神山をモチーフにした舞物語の衣装に白のサリー風のドレスというのは、ちょっと考えると合いそうもないのですが、現代の龍の涙を舞い演じるのには最高のドレスだと、自分では思っていましたので、褒められた時には思わず万歳をしてみました。

先生からは、本当は一週間とか十日間の連続公演が出来る、舞技がもつと深みのあるものとなって良いのだけれど、第三ステージからかな、と言われています。

朗読舞という舞台表現が、確りとした市民権を得て、ロングラン公演を打てるように早くなりたいたいと思います。

公演を観てくれた友人達からは、早々と十一月公演の題名は決まりましたか、と言われ、観劇の約束を頂きました。

本当に楽しく、嬉しい六月公演でした。

## 古代エジプト文明の風にふかれて(4)

兼平ちえこ

当会報四十七号(先月の四十九号にて四十六号と誤報訂正します)より、三月八日〜十五日エジプト周遊八日間の旅をお伝えしています

四回目の今回は、ナイル川を挟んで東西に二分されているルクソール東側から参ります。

中王国時代(エジプトが再統一された時代)から新王国時代(ツタンカーメンやラムセス二世が生きた時代)にかけて、数多くの葬祭殿や岩窟墓が造られた「死者の都」と呼ばれたエリアである西側に対し、東側は日が昇る「生者の都」であり「神の都」でもあり、神神の集うところであった。

中心部にあるルクソール神殿、そして国家最高神であるアメン神のため造られた巨大なカルナック神殿、この二つの神殿はスフィンクスが立ち並び参道で結ばれていたという。今もその一部が残されていた。

ルクソール神殿はカルナック神殿の副殿で、参道、塔門、中庭、大列柱廊、等バランスよく配置されていた。現存する神殿の大部分は新王国時代第十八王朝のアメンヘテプ三世と第十九王朝ラムセス二世の二人が建設したもので、アメンヘテプ三世の息子アメンヘテプ四世は、強力な神官団に支配されたアメン神信仰を嫌いアマルナに遷都。神殿は荒れ果てたが、次王のツタンカーメンが修復、一部完成させているという。

高さ二十四mの第一塔門には、カデシュの戦い(ラムセス二世とヒッタイト軍が東地中海の覇権を争った戦い)の様子が描かれてあり、この門より十cmほど高い、一本のオベリスク(ピラミッドに付属する太陽神のご神体だ

つたが、次第にピラミットにとつてかわるようになった。が青空を突らぬくように二十五mの四角錐の姿を誇っていた。

このオベリスクにも隙間なしに絵文字が刻まれている。対になっていたもう一本のオベリスクは現在パリのコンコルド広場にあるとの事。

塔門を潜るとラムセス二世の中庭に導かれ、閉花式パピルス(薔の形をしたパピルス)柱とラムセス二世の立像が交互に並んでいた。

これらの古代人の成した技を見上げながら大列柱廊へ。

巨大な開花式パピルス(開花した形のパピルス)柱が二列、十四本立ち並ぶ。そしてツタンカーメン王とアンケセナーメン妃の座像が静かに見守っていた。そこには十三世紀に建てられたモスクも現役であった。

巨大なパピルス柱は高さが十九m。左右の壁にはオペトの祭り(カルナック神殿からアメン神、妻のムート女神、息子のコンスの神像を神輿に乗せてルクソール神殿まで運び国をあげての祭りを行う)のレリーフがあり、入って右側は往き、左側には帰りの様子が描かれている。合計六十四本の閉花式パピルス柱が立つアメンヘテプ三世の中庭は大列柱廊とは対照的な柱が立っている。

そして最後には皇帝崇拜の場。ローマ時代に改造された場所でコリント様式の柱や円形のドームが設けられローマ風の人々を描いたフレスコ画も見られた。

いよいよ二千年かけて大増築したエジプト最大級の神殿、正殿のカルナック神殿へ。

アメン大神殿(面積三十畝)を中心とし、南のムート神殿、北のメンチュ神殿を加えた広大な神殿で

ある。

中王国時代にはアメン神を祭る神殿だったが首都テーベの時代にはアメン神と太陽神との合体で国家最高神になる。

新王国時代に入るとハトシェプト女王やトトメス三世、セティ一世、ラムセス二世等により神殿が建立され、その後も建造が続き、プトレマイオス王朝やローマ帝国時代の遺跡も残る、第一から第十の塔門を配するエジプト最大級の神殿であった。

かつてはルクソール神殿との間を結ぶ参道が両脇のスフィンクスによって守護されていたという。現在は第一中庭から運びだされた牡羊の頭のスフィンクスが並んでいた。

第一塔門へ。当時の塔門はレリーフの彩色も鮮やかでさまざまな色の旗が翻っていたという。

第一中庭にはラムセス三世、セティ二世それぞれの神殿。左右二体のラムセス二世の像。足の間にいるのはベント・アナト妃とされている。

第二の塔門に入ると大列柱室。一三四本もの巨大な石柱が並ぶ。中央通路の両側の十二本は高さ二十一mの開花パピルス柱、その他は高さ十五m閉花パピルス柱、原初の海にパピルスが茂る様子を表しているという。それらの柱にはセティ一世の勝利のレリーフ、ラムセス二世のカディシユの戦いのレリーフが勇敢さを語ってくれた。また開花式パピルスの柱頭の上には五十人もの人が乗れるという。

第三塔門を入ると、トトメス一世のオベリスクがそびえ立つ、第四、五、六の塔門は真つすぐに続くが、見学は第三を入ったところから右へ曲がり第七、八、九、十塔門の方向へ。間もなく聖なる

池の前に横たわったオベリスク。

ハトシェプト女王がアメン神と父トトメス一世に捧げたもので、エジプト国内に現存する最大のもので高さ二九・五六m。かつては先端に金箔が貼られきらきら輝いていたという。

建造物と壁画とレリーフと驚異的な古代の栄華を仰ぎ見た神殿、夜は異次元の世界へと誘ってくれた音と光のドラマ。

ライトアップされた遺跡に浮かび上がるレリーフ、輝く聖なる池、神話や歴史を解説するナレーションが壮大なカルナック神殿に響き渡る。

幻想的な素晴らしい演出に大拍手。次回はルクソール以南に参ります。

・龍の背に母がいて

・かあさん先に逝ってるね

母と背ならべ

・みどり深く街路樹とのえて

ちえこ

## 《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦  
蕎麦会席料理のお店です  
(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが  
皆さんをお迎えいたします。  
営業時間 11:30~15:00  
16:00~18:00  
月・木曜日が定休日です。

電話 0299 - 43 - 6888

玉里御留川を学んだ事で、今の霞ヶ浦の事をよ  
り知りたいと思うようになって、特に其此に住む  
人達の事も大切にしたいと思う様になった。此所  
の地域の長い歴史から見ると私の知っている七十  
年位は極一部にすぎない。況してや此所で生  
活して来た人は数えきれない程だが今生活してい  
る一人一人を知る事で見えなかった生活を細くき  
っかけにしなければと思う。

私が此所に住み始めてから間もなく四十年にな  
る。その当時出合ったご夫婦がこの地の歴史や人  
の暖かさを呉れた。ご主人は私が勤めに行く道添  
いで畑仕事をしていた。穏やかな感じの人だった。  
連れ合いの奥さんと合ったのは、自転車を引き  
て小魚を売りに行く時よく合った。二人とも若くて  
働き盛りだった頃だ。この辺は霞ヶ浦縁に住居が  
あり、畑に行くにも他所へ行くにも坂を上らなけ  
ればならなかった。農具を持って歩く姿も、自転  
車を引く姿もいきいきとしていた。

それからどの位経つただろう。新盆詣りの帰り  
道、家の前を通りかかった時、お茶を勧められて  
おじやました。この時始めてゆっくり話をした。  
もう子供さん達は一人立ちしてお家には二人きり  
だが、お盆だから皆帰ってくる嬉しそうだった。  
話は次々に出てきて尽きなかった。親達は漁を  
主に細々と暮らしてきた。終戦後、田畑を手に入  
れて耕作したが漁から農に変わっても生活は苦し  
かったという。リヤカーから耕運機に変わって少  
し楽になった頃、ご主人の乗っていた自転車を奥  
さんに譲って新しい道がひとつ広がったそうだ。  
子供等が大きくなってくると金がかかる様になっ

たから稼ぎに行く事になった。奥さんは頑張やで  
雨の日も、暑い日もよく働いた。余程の事でもな  
けりや休まなかった。

奥さんの毎日持つてくる現金収入は有難かった  
という。二人とも元気で痛いところ知らずだった、  
とご主人は奥さんを見ながら話してくれた。奥さ  
んも声高く当時の話を始めた。その頃魚の行商  
に行く人は大半がバスだった。おらより年上の人  
が石岡の方へ行くのが多かった。一寸年下は歩き  
で小川から先、大橋、小井戸の方へ行つた。自転  
車に乗れる人は少なかったが、ご主人に貰った自  
転車で、遠く迄行けたから金にもなったという。  
とても得意そうにそうに話してくれた。二人の話  
しを聞きながら、黒ずんだ土間の梁がこの一家を  
雨風から守ってくれたのだろうと眺めていた。盆  
棚に飾られた位牌、馳走、供物も代々継がれてき  
たものだと思えて、頂くお茶もばらっぱ餅も美味  
かった。先祖さまには家で咲いた花をあげんだよ  
と言いながら新聞に包んでくれた。特別な付き合  
いが無いご夫婦なのに、こんな暖かい思いを頂い  
た事がいつまでも残っていた。

その後は今まで以上に親しさも増して、交わす  
挨拶の響きも変わった様に自分でも感じた。(時が  
刻まれていく事は間違いない)と改めて思う  
出来事が少しづつ起きていた。

若い人達が故郷に戻って来て、台に新しい家が  
出来、二人も一緒に暮らす事になったと聞いて我  
ことの様に嬉しかった。間もなく二人で古い家へ  
歩いて行く姿をよく見た。奥さんの話ではご主  
人が誘って煩わしいんだという。二人とも田畑も  
行商もとうにやめていた。特別やる事もないが、  
あるともいえるという。古い家の片付けでもしよ

うかと二人で二人で行く事にしたという話だった。  
ご主人は農具を整理整頓する事にし、奥さんは衣  
類を片付け始めたが身が入らないという。もう住  
まい家はどうでもいい思うと、やる気もしないん  
だという。それに落ち着かなくて仕様がないうと零  
していた。ある日思い切つて言つてみたそうだ。

「毎日行かなくてもいいかっぺよ」  
すると、

「じゃ、俺一人で行つてくつからいい」

「何で毎日行かなくちやなんねえの」

「婆さんが待つてからな」

「婆さんはここにいっぺよ」

「もう一人の婆さんがいんだよ」

と言つたとか。始めは気が着かなかつたけれど  
少し経つて、そうか母親の事だと解つたそうだ。

位牌も写真も新しい家に持つて来たのに可笑しい  
と思つたが(おつかさんの居た家に行きたいんだ  
と思つて)それから何も言わないで着いて行つて  
は帰つてきたという。人はいなくても花は咲いて  
いたからと抱えて戻つたりした日もあつたそうだ。  
それから奥さんは亡くなった。さぞご主人はし  
よんぼりしてしまつたかと、半信半疑でお通夜に  
伺うと、

「母ちゃんも婆さんの所へ行きました。安心し  
やした」

と通夜詣りの人に挨拶をしていた。とてもいい  
顔で、このお家の雰囲気とご主人の生き方の良さ  
を感じて帰る春の夜だった。

今も一人で古い家にせつせと行つていそうだ。  
「婆さんの所へ行つて来っからね」

とたずねられると言うそうだ。狭い道では土手  
に腰をおろして車の通り過ぎるのを待つている。

私も夕方二度程合った。一度は古い家から帰ってくる所だった。声をかけると、

「ごめんなさいね。婆さんが遅いと仕様がなから、急いで帰ってかきまじやつとくのでね」

と擦違った。腰を屈めて小さくなったご主人嘗ては大きな声を出し、力一杯田畑を耕していた。

二度めは古い家へ行く途中だった。県道は車が多くて渡れない。私の心配をよそに、

「だめだよ。渡んだねえよ。危ないからな」

と押さえてくれる力の強さに、小さく可愛らしくなったこの人が一途に向かう古い家には、何が見えて、何が聞こえて、何が感じられるのかと見送った。

現実には新しい家で生活をし、その生活に順応していると聞く。朝に仏壇にお茶をあげ、夕方には下げたり今の暮らしをしている。でもあの家に行かなくては行かない。その思いは何だろう。妻と子供を養い苦労した日々があった、お互いを支え合った時間に合っていくのだろうか。それとも父親、母親と生活した日々の懐かしさの中に浸りに行くのだろうか。誰かに合っていくのだろうか。何かを確かめに行くのだろうか。楽しそうにいき帰ってくるのだからはたで心配する必要もないのだが。

でも先日解った。

「としより婆さんの所さ行ってくつからな」

と言ってでかけたという。(母ちゃんの所へ、母ちゃん、おっかさん、御袋、婆さん、としより婆さん)呼び方はいろいろと変わったが、(俺の大好きなかあちゃん)なのだった。そこへ向かって毎日毎日行かずにはいらなかったのだろう。

「風」の仲間の話しの中に出て来たS先輩の話

しを思い出した。(母親、母体)が安心して戻れる所であり、人生の疲れを癒してくれる人の存在なのだという。本当に古い家には暖かい優しい、遅い母ちゃんがいるのだ。古い家に行く事は幸せそのものなのだ。

## 補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけではいけないのです。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。

(場所：石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可)

石岡市石岡 2158-6 電話 0299-24-3881

## ふる里の歴史・文化の物語を朗読に聞く夕べ

(毎月第2土曜日 19時より)

いしおか補聴器では、ふるさと風の会、ことば座の協力で、ふるさとの歴史・文化の物語を、囲炉裏を囲むような形で、朗読に聞く「ふるさと知ろう会」を開催しております。

8月14日第10回朗読会＝打田昇三作「興亡の連鎖(その六・)失意の谷」現在の石岡市が元気が無いのは、古代の国府だったこの地に連綿と続いた豪族が六百年前の事件によって没落してしまったことに遠因があるように思えてならない。打田史学が語る、大掾一族が滅亡へひた走る戦乱の世の物語最終回。

定員は10名程度となりますので、ご予約の連絡を頂ければと思います。

朗読後、作者を囲んでのお話し会があります。

朗読会参加料金 1,000円 (コーヒーor お茶、お菓子付き)

## 興亡の連鎖(その二) 打田昇三 II 権威の迷宮 II

この話は「その一」が室町幕府の途中から始まったので、少し遠回りにはなるが幕府創始者の足利尊氏と、その先輩である源頼朝の周辺に戻して必要なことを紹介して置くことにする。

日本の指導者が「帝国主義」と言う病気に侵されていた昭和初期に「足利尊氏は偉人である」と発言してクビになった大臣がいたらしい。偉人かどうか疑問はあるが、源頼朝以来の鎌倉幕府、と言うより当時の執権(実質的な内閣総理大臣)北条高時が遊び呆けて側近の悪政を招き支持率が大幅に下落したのをチャンスに後醍醐天皇が天皇親政を夢見て北条氏追討の口火を切った。…それが成功して功労者の第一に挙げられたのが足利尊氏である。実戦では楠木正成や新田義貞らが活躍したようであるが知名度が低かった。建武元年(一三三四)論功行賞により足利尊氏は東海道の東にある常陸、下総、武蔵各国の守護を管轄する任務を与えられた。茨城、千葉、埼玉、東京、神奈川の軍事・警察・行政を監督する職務である。

足利氏は八幡太郎義家の孫・義康が先祖である。源頼朝の祖父・為義は義家の後を継いで源氏の嫡流になったが嫡男ではなく孫になる。父親が謀反人となったために祖父の義家が養い、一時は義康の叔父(義忠)の養子だったこともある。そのために尊氏の先祖は源頼朝の信任を得て六代前の義兼が北条政子の妹を娶って以来、長年に亘り北条氏と婚姻を結び一族に準ずる扱いを受けてきた。しかし尊氏の三、四代前からは源氏系が北条氏から疑いの目で見られるようになっており、尊氏の

母親は藤原北家勸修寺(かじゅじ)流上杉氏の出身である。微妙に距離が開いていた北条氏との関係は、尊氏が北条一族の有力者である赤橋守時の妹・登子を妻にしたことで少し回復していた。

元弘元年(二三三二)、度重なる後醍醐天皇の幕府転覆運動が露見して「元弘の乱」が起こった。

北条氏は大軍を差し向けたが、諸国に反幕府の勢力が拡大したため、元弘三年には足利尊氏も一方の大将として出陣を命じられた。その時期に尊氏は父親を亡くして喪中であり、かねてから北条高時の政治に呆れてもいたので、出陣はしたが戦う気は無かった。何よりも源氏嫡流の足利氏が家来筋の北条氏に使われていることが許せなかったから後醍醐天皇の誘いに応じて反旗を翻した。

足利尊氏の離反は幕府側の大きな痛手である。

後醍醐天皇の素人革命は成功したが、天皇の側近ばかり優遇されたので武士の不満が高まり、尊氏の出世に期待する者が増えてきた。尊氏は建武二年(一三三五)七月に北条氏の残党が鎌倉へ押し寄せた「中先代の乱」の救援に行った序でに後醍醐天皇にも愛想を尽かし独立を宣言した。延元元年(一三三六)には、未だ天下を手中にした訳でも無い時期に無理して北朝の光明天皇を擁立し室町幕府を開いたのである。この年は南朝方の有力武将である楠木正成などが討ち死にし、後醍醐天皇も都落ちして吉野の山奥へ遷っている。

その室町幕府は、一時的だが將軍を支える京都の勢力と、鎌倉府に拠点を持つ鎌倉公方との間に対立が起こり二つの幕府が存在するような状態が生じていた。頼山陽が著した「日本外史」によれば三代將軍・義満の頃には足利氏支流の斯波(しば)、細川、畠山の三氏が「三管三管領(さんか

んれい)」として室町幕府政権の中枢にいた。畠山氏は石岡市の平福寺に墓がある平国香の弟・良文を父祖とするから桓武平氏なのだが、源頼朝に従っていた重忠が死んで未亡人が足利氏と再婚したため子孫は足利氏を称していた。余談だが、その未亡人も北条政子の二番目の妹である。

管領の下に武將を取り締まる「侍所(さむらいどころ)」があり、その長官となる山名、一色、京極(きよく)、赤松の四氏が「四職(ししよく)」と呼ばれていた。山名氏は清和源氏新田系、一色氏は足利の支族、京極氏は宇多源氏の佐々木系、赤松氏は村上源氏を称していた。そして甲斐源氏の武田氏と小笠原氏が武將の礼式を司り、吉良、今川、渋川三氏が武者頭、伊勢氏が將軍との取次役であった。この七家は「七頭(ななかしご)」として権威を持っていた。吉良など三氏は足利の支族であるが、伊勢氏は桓武平氏系で早くから足利氏の家臣になっていたというから、常陸国を弟に譲って都へ行った平貞盛の分流だと思われる。

中央の「三管領、四職、七頭」に擬して、鎌倉では足利尊氏の次男・基氏の子孫が「関東管領」を世襲し、中央の管領に当る「執事」は尊氏の伯父に当る上杉憲頭(のりあき)の子孫が世襲していた。「その一」で述べたように、関東管領・足利持氏が將軍になりたくて自分勝手に「鎌倉公方」を称したため、執事の上杉氏が格上げで管領になってしまったが、本来の組織では足利持氏も京都の三管領と同じく將軍の下に位置するのである。

この我儘な人物に支配される関東の武士団は、千葉、小山、長沼、結城、佐竹、小田、那須、宇都宮の八族が八館(はちやかた)と言われ重要視されていた。千葉氏は桓武平氏であり、小山、長

沼、結城の三氏は平将門を討つた藤原秀郷系で下野大掾（しもつけだいじょう）を世襲した家系、佐竹氏は清和源氏の新羅三郎義光流で、小田、那須、宇都宮の三氏は藤原北家（道兼流）をそれぞれ称していた。そして東北地方には初代・関東管領の弟が陸奥と出羽を管轄する任務の「探題（たんだい）」として配置されていたが、後には重臣の一族が複数で赴任したらしく、そのための勢力争いも頻繁に起こり、東北地方には早くも「群雄割拠」の兆しが表れていたと推定される。

関東武士団を見て不思議に思えるのが、石岡之城を構えて桓武平氏直系を唱えていた大掾氏の名前が「八館」にないことである。「常陸名家譜」という本では「関東の八将」に大掾氏が入っているらしいが、該当したのは馬場系大掾八代目の詮国（あきくに）のようで、八館が選ばれた頃は息子の満幹が当主である。満幹は別に怠けていた訳では無いが複雑な幕府内事情にうまく対応出来ず、二流武士団に格下げされてしまったらしい。残念ながら昭和初期の「歴史年表」でも千葉氏から宇都宮までを八館としている。ただ長沼氏は後に八犬伝で知られた里見氏に変わるから、格付けも変更があり大掾氏がダメだったとは言い切れない。

その代りと言うのも変だが大掾氏と、同族の小栗氏、それに佐竹分家の山入氏の三家は常陸武士団の中では「京都御扶持衆（ききょうとごふちしゅう）」と呼ばれていた。これは鎌倉公方に支配されている武士団でも特に室町幕府の將軍に心を寄せ直々に信頼されている：職場の部・課長辺りに良く思われていなくても社長からは目を掛けられている：と言うことで、ちよつと見には良いかも知れないが苦勞の多い立場である。名門の大掾氏も

結局は、それが災いして没落することになる。

悲しい話をする前に、分かっておられる方は多いと思うが「大掾氏とはどういう家系なのか」室町幕府重臣たちの出自を紹介した序に触れておきたい。平国香ら桓武平氏一門が筑波山麓一帯に保有していた広大な領地は、承平・天慶の乱で平将門が討ち取られてからは大部分が嫡流の貞盛に渡った。貞盛は、その領地を弟の繁盛に与え、自分は都へ上つて官僚勤めをしていたが、藤原氏の興隆期であるから容易には芽が出ない。ようやく子孫が伊勢国の国司になり土着して少しずつ力をつけた。太政大臣として平家全盛時代を築いた平清盛は貞盛から数えて七代目とされている。

常陸国に残った平繁盛の子孫は、在地豪族として国府の判官職である「大掾」を世襲した。日本六十余州の中で最上の国である常陸は淳和（じゅんな）天皇時代の天長三年（八二六）九月から上総・上野（かずさ・こうづけ）と共に親王が名目だけの国守となる国に指定されたため、補佐役の次官もお飾りとなり、実際の権限が大掾職に集中して常陸大掾氏は富と権力を独占し、その豊かさは「日本一」と言われた。そして常陸国から都へ上った平氏は「平家物語」に日本六十六か国のうち半分以上が一門の領地：と書かれるほど繁栄したのである。世の中、好運が過ぎると多くの妬みを買う。天下を手中にした平氏も、その同族で日本一の豪族であった常陸大掾氏も例外では無く、周囲の反発を買い遂に滅びてしまうのである。

太政大臣・平清盛の継母、つまり平忠盛の後妻で夫の死後は仏門に帰依していた「池禅尼（いけのぜんに）」は藤原隆家の六代目子孫である。隆家は清少納言が仕えた定子皇后（一条帝皇后）の弟

で公家ながら海賊撃退に勇名をせたり、前の天皇を脅したりする藤原一族の変わり種であった。その血を引く池禅尼も日本の歴史を大きく変えていた。源頼朝は少年時代に平治の乱に敗れ十中八、九は殺されるところを池禅尼が助けたのである。

源頼朝の密かな願望は「源氏ゆかりの鎌倉に居て、関東一円の武将たちの頭領になりたい」ぐらいのことだった筈だが、源氏の嫡流なるが故に各地に起こった反平家運動に巻き込まれるような形で政権を握ることとなり建久三年（一一九二）いくにつくろう）七月十二日、征夷大將軍に任命されて鎌倉幕府を開いた。しかし伊豆の山村で二十年も囚人生活をしてきた男にいい国が造れる訳が無いから、結局は各地の豪族が支配していた農民と土地を、新設した守護・地頭を介して武士階級が支配するようにしただけで庶民の暮らしは平家時代と変わることが無かったと思う。

其れはともかく頼朝は翌年の五月に軍事訓練の目的で富士の裾野の巻狩りを大々的に行なった。その頃の大掾氏は広大な領地を譲られた平繁盛の直系子孫であり、筑波山南麓の多気（たけ）山に館を構え「多気大掾（たけのだいじょう）」を称していた。祖先の平国香と同じように館から石岡の常陸国府庁舎までは馬で通勤していた筈である。大掾は従来の国府の判官職であるが、源頼朝が自分流の守護・地頭を設置したため職務権限がややこしくなった。仕事に司法権も含まれていた大掾職と、警察のような立場の守護職とはどこかであらう部分があったかも知れない。

常陸国の守護には頼朝の信任が厚い藤原系の八田知家が任命された。その管轄圏には日本一の豪族で平氏系の多気大掾氏が居る。「これを何とかし

なければ」という思いが八田知家に常陸大掾職を欲しがらせた。知家は頼朝に願ひ出たが、さすがに頼朝は許さなかった。政子夫人の北条氏が、平貞盛の子・維将（これまさ）を祖先とする桓武平氏を称していたから同族の大掾氏に配慮したとも考えられる。そこで知家は、相手の動きを知り易いように常陸大掾館近くに小田城を築き、さらに北条氏を巻き込んで手の混んだ策謀を用い多氣大掾義幹を蹴落とすことにした。知家の子孫が小田氏であり、戦国時代には大掾氏と戦う。

建久四年五月二十八日の夜、雨風が吹き荒れる中で曾我兄弟による工藤祐経（くどうすけつね）暗殺事件、世に言う「富士の裾野の仇討」が行われた。この騒ぎを利用した八田知家の謀略にかかり常陸国の大豪族・多氣大掾義幹は反逆の容疑で領地全部を没収され、伊豆の地侍・岡部泰綱に身柄預けとなった。義幹の妻子は曾我兄弟にも工藤祐経にも同族になる狩野氏に引き取られた。曾我兄弟の母親にとつて大掾義幹の妻は叔母になる。曾我兄弟の仇討に至る過程と、豪族たちの関わりとは源頼朝の悲恋から挙兵にも関連して、壮大な物語になるのだが、話が逸れるので今回は触れずに置き、稿を改めて述べることにする。

源頼朝は多氣大掾義幹から没収した領地も八田知家には与えなかった。義幹の遠縁で妹婿とも言われる大掾末流の馬場資幹（ばばすけもと）に相続させた。資幹は水戸市吉田を本拠としていた大掾支流吉田系の末流・石川氏の人物で早くから源頼朝のもとに馳せ参じていたようである。この辺りを勘ぐれば、多氣大掾本流の滅亡に分家関わっていた疑いも湧いてくるが「証拠不十分」で不起訴にされそうなので黙っています。資幹は水戸

城に進出していたが、二十数年後には府中（石岡）外城の地に石岡城を構えたとされている。

「因果応報」などとは言えないが馬場系大掾氏は南北朝時代に「今日は南朝、明日は北朝」へと尻尾を振りながらも「棚からぼたもち」のように手に入れた水戸から石岡までの土地を何とか持ち堪えてきた。律令制度の崩壊で地方の国府は存在の意義を失ったと思うが、役所が無くても困るので大掾職を世襲する馬場氏は形だけにしても「地

方行政」を扱ってきたのであるうか、時には「南」だの「北」だのと言ってはいられたのか、それかもしれない。気の毒ではある。それが大掾詮国の時代に、或る思いがけない騒動に巻き込まれてしまったのである。その騒ぎとは：

柿岡盆地を囲む筑波山塊の東端に位置する難台（なんだい）山は、標高僅か五五三mの山であるが涸沼川の主水源を成し石岡市（八郷地区）と笠間市との境界でもある。現在では完全に忘れられ

## ふるさと風の文庫

### 新刊

- ◎ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の  
歴史エッセイ「ふるさと風にたずねて」（国分寺余話）（1000円）
- ◎小林幸枝「風に舞う」（2）（定価：500円）
- ◎白井啓治「ふるさとの風に吹かれて」（定価：1000円）
- ◎兼平ちえこ「風のことば」（2）（定価：500円）
  
- 伊東弓子作 「風のかげ」（定価：400円）
- 打田昇三：ふるさと「風にたずねて」（I・II・III・IV・V・VI）  
（定価：1000円）
- 菅原茂美第一作「遥かなる旅路」（1）（2）（定価：500円）

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文を集成！！

- ふるさと「風のことば」（定価500円）

日々の暮らしの中にふるさとを想う心を呟いたエッセイ集

- 兼平ちえこ「風に押されて」（定価500円）
- 小林 幸枝「風に舞う」（定価500円）
- 白井 啓治「移ろう風の中に」（二冊組：800円）
- 近藤治平「風に吹かれて」（二冊組：800円）

ふるさと風の文庫は、・ギター文化館：0299-46-2457

・いしおか補聴器：0299-24-3881

にて販売しております。

ふるさと“風”の会 事務局 石岡市石岡 13979-2（白井方）

電話 0299-24-2063

ているけれども、山頂近くにある小さな城跡は、常陸国における南北朝最後の合戦が行われ、南朝勢力が消滅して常陸国が完全に足利政権の支配下に入ったことを象徴する…とされる「南台山城攻防の古戦場跡」なのである。そして山麓の西南数キロの有明地区（旧・八郷町）には「有明の松」が残っていて、難台城落城の悲話を伝えている。昭和四十五年に出された「八郷町誌」には「伝説」としてこの話が収録されていたのだが、石岡市との合併前に出来た「八郷町史」では難台山が戦場になり武将たちが右往左往した概略の記録しか無いから、この伝説も余り知られなくなった。

現在の「有明の松」は立派な庭樹程度の松で、これは植え継がれたものと推定されている。武将たちと同じで、何代か前の古老松が見聞した話を伝えているのである。現場に建てられた「史跡案内」も高齢化して読めず、内容にハッキリしない部分もあるが、概ね次のような物語であるから、まずはそれを紹介してから、合戦の概要とそれに関わった武将たちの盛衰を顧みてみたい。

大軍に包囲されながら十か月ほど持ち堪えていた城も食糧を運び込む秘密の山道が敵方に知れて遂に落城の日を迎えた。城の各所に火の手があたり逃げ去る城兵も多かった。覚悟を決めた城主は、敵の目を避け女性と子供に何名かの家臣をつけて脱出させた。一行は敵が囲む東を避け一旦は背後の山を登ってから闇の中を道の無い西に下りた。手足を傷つけながら必死で難台山を離れ、夜明けに辛うじて一本松まで辿り着いたのである。そこには敵軍も居らず、爽やかな夜明けであったから一息ついた一行は自分たちの行く末が、この遅しい松にあやかるようにと「有明けの松」と名付け

て立ち去った…この出来事は南北朝の歴史・最後の一ページになるのである。

難台山落城の時期は元中五年（一三八八）五月とされており、足利義満が室町幕府第三代の將軍となつてから二十年も過ぎていた。南朝と北朝とに分かれて争っていた陣営がやつと和議を結んだのは正平六年（一三五二）十一月であるが翌年にはご破算となり以後、四十年も過ぎてから、元中九年（一三九二）十月五日に、ようやく南朝の後亀山天皇が北朝の後小松天皇に「三種の神器」を渡して天皇制が一元化された。難台山落城は日本の歴史の無駄遣いとも言える「四十年間」に起きた事件であり、嫌でも関わりを持たせられ、それが原因で大損をさせられた地元武士団にとっては全く「厄病神」の出来事であった。

王様でも天皇でも制度として存続している限り王（皇）族に生まれれば、誰でも其の地位に就きたい。特に日本の南北朝時代は皇室が保有する膨大な荘園があつたから周りを取り巻く公家の思惑も絡んで後深草天皇と亀山天皇の兄弟が党派を結成して派手な相續争いを展開した。その頃の日本は、強力な国家に発展したモンゴルの襲来を撃退はしたが再度の国難が憂慮されたから、鎌倉幕府も天皇家の相續問題などにかまっていられない。面倒なので弘安九年（一二八六）に「相互の交代制にしろ！」と言った。暫くはその様にしていただけだが、引退した天皇が先帝として幅を利かしたり院政を行つたりして交代が順調にいかなくなると文保元年（一二三二）に鎌倉幕府が「両統迭立の議（りようとうてつりつぎ）」を定めた。つまり天皇を二つの流派から交互に出すことを制度化したのである。その頃に順番が来たのが、天皇即位

後に幕府が干渉することを不快に思っていた後醍醐天皇である。新しい定めに依れば、自分は即位出来たが息子を後継者には出来ない。

「北条氏を倒すべし！」度重なる計画に失敗しては、忠臣と言われる公家たちが犠牲になつて後醍醐天皇のクーデターが成功したのが元弘元年、それから五十七年、国中が乱れに乱れて人民が苦しみ、態勢としては南朝が衰退して北朝が残り、現在まで続く天皇制が確立された訳である。庶民にとつては**どうでも良いこと**なので「…いい加減に、この辺で止めにしてくれ…」と誰もが思っていた筈なのだが、世の中には「諦めの悪い人物」が居るもので各地で戦つても分が悪かつた南朝方の新田一族が、北朝を牛耳っている足利氏への対抗意識から無駄な抵抗を何時までも続けていた。新田・足利両氏は先祖が同じ源氏であつたから、余計に憎しみが増すのであろう。

昭和二十年までは、後醍醐天皇が建てた南朝の為に最後まで抵抗した武士が「忠臣」と讃えられていたけれども、合戦で苦しまされるのは国民である。戦争を起こす奴も悪いが、長引かせる奴は本当の悪人である。関東では新田一族と手を組んで下野（栃木）の豪族である小山義政が北朝を代表する室町幕府に反抗していた。関東は鎌倉府の管轄であるから、直接には鎌倉への抵抗になる。

天授六年（一三八〇）五月、南朝軍として兵を集めた小山義政は、鎌倉方の宇都宮基綱と戦い、これを討ち破つた。大将の基綱は戦死して兵は宇都宮城へ退き鎌倉に救援を求めた。勢いに乗つた小山軍は宇都宮城を包囲して攻め立てた。鎌倉からは上杉憲方が大将として派遣され関東の諸將を指揮して戦い南朝勢を追い払つた。小山義政は捕

らわれ一旦は服従したが、再び背いたために殺害された。この争乱には関東近辺で幕府方に付いていた武將たちに「直ちに宇都宮城へ救援に赴くよう」と鎌倉管領の足利氏満から出動命令が出された。石岡城に居た大掾詮国も例外では無く軍勢を率いて筑波山を越え宇都宮へ出陣した。

石岡市史には、大掾詮国が一族の鹿島氏を率いて小山城攻撃に活躍し「関東の八将」にかぞえられたと記されている。然しながら、この時代に辻褄が合わないことが大掾氏に起きている。それは現在の水戸、内原、友部に及ぶ河和田、赤尾関、鯉淵という広大な領地を大掾詮国が失っているからである。下野国まで出陣して活躍したのに、なぜ領地を失ったのか？その謎を「有明の松」が知っていたのである。

(つづく)

#### 興亡の連鎖 その二 関連資料

「その時代の主な出来事」

元弘元年（一一三三）

元弘の乱起こる。後醍醐天皇の幕府転覆計画が漏れ、関係者が捕らえられる。後醍醐天皇が笠置へ逃れる。楠木正成率兵、笠置落城、北朝の光厳天皇が即位、後醍醐天皇が捕らえられる。楠木正成が赤坂城に拠るも落城。常陸国では大掾氏も鎌倉の命により出兵する。

元弘二年（一一三三）

後醍醐天皇が隠岐の島に遷される。関係者処分。楠木正成が千早城を築く。護良親王が吉野に率兵し、各地に南朝方の義兵が起る。

元弘三年（一一三三）

後醍醐天皇が隠岐の島を脱出、新田義貞が南朝方で率兵、各地で幕府軍と南朝方が合戦。大掾高幹・幹国父子は新田義貞と戦う。足利尊氏は幕府軍の將として出陣したが、戦闘に加わらず、後醍醐天皇に帰順。

新田義貞の軍が鎌倉を攻め、北条氏が滅ぶ。

建武元年（一一三四）

建武中興の政治（後醍醐天皇の親政）が行われたが、武士階層に恩賞への不満が出る。

建武二年（一一三五）

北条氏の残党が鎌倉を攻める（中先代の乱）。大掾高幹は攻めてきた北条氏に味方する。

足利尊氏の離反

常陸国では佐竹氏が守護に任命され力を増す。

延元元年（一一三六）

北朝の光明天皇即位、後醍醐天皇は吉野へ。足利尊氏が室町幕府を開く。

これより南北両朝廷の軍が各地で戦う。

常陸国内でも南北両軍に分かれた武士団が戦う。

南朝方の武將・春日頭時が石岡城に寄る。

延元二年（一一三七）

全般に北朝側が優位に立つ。常陸国では佐竹氏が北朝につく。しかし大掾氏は南北両朝の間で揺れ動き、そのために石岡近辺で合戦が起る。南朝勢が危機に瀕し、宇都宮へ行った春日頭時が戻って来て玉里城へ入る。（小川合戦など）佐竹軍が大掾氏に攻撃をかける。

延元三年（一一三八）

足利尊氏が征夷大將軍となる。

大掾高幹が北朝側に転じる。

北畠親房らが常陸国に来て、多氣大掾系の東条氏ら霞ヶ浦一帯の武將たちに迎ええられる。

大掾軍は佐竹氏に属して南朝方の神宮寺城を攻める。南朝方の小田軍、志筑軍が石岡城を攻撃。足利尊氏の重臣・高師冬が石岡城に来る。

延元四年（一一三九）

後醍醐天皇が吉野で死亡、南朝方の後村上天皇が吉野で即位。北畠親房が神皇正統記を著す。

小田氏など南朝方の武將が足利尊氏に降る。

大掾系の税所氏が高師冬から石岡城の警護について賞される。

正平元年（一一四六）

大掾詮国が常陸国府跡近辺に府中城を築く。

正平四年（一一四九）

室町幕府が鎌倉に「関東管領」を置く。

正平六年（一一五一）

南北両朝廷の間に和議が結ばれる。

正平七年（一一五二）

室町幕府内部の抗争、南北の和議破れる。

新田氏が上野国に反幕府の兵を挙げたために、

大掾高幹は足利尊氏の命により出陣して碓氷峠で新田軍と戦う。

正平十三年（一一五八）

足利尊氏死し、義詮が二代將軍となる。

正平十六年（一一六一）

南朝軍が一時的に京都を占拠

正平二十二年（一一六七）

関東管領が二代目（足利氏満）となる。義詮が死亡、足利義満が三代將軍となる。

天授四年（一一七八）

足利義満が室町に御所を造る。（室町幕府）

天授六年（一一八〇）

小山朝政が南朝方で兵を挙げる。常陸から大掾詮国が兵を出す。

弘和二年（一三二二）

小山義政が南朝方として鎌倉管領の軍と戦う。

元中二年（一三三五）

新田軍の残党が関東で南朝方の兵を挙げる。

元中四年

小山義政の遺児が兵を起し難台山に拠る。

元中五年

難台山城が落ちる。（有明の松）

常陸国が足利政権の支配下に入る。

大掾氏の没落が始まる。

清和源氏と足利氏

清和天皇—貞純親王—源経基（平将門の謀反を都に報告し、また将門追討に参加して功を認められ鎮守府將軍となる。武臣として「白旗」を用いる）

—満仲（摂津国多田に居て職を継ぐ、左馬頭）—  
—頼信（兄は四天王を従えた源頼光）—頼義—八幡太郎義家—（子の義親は罪を得て追討されたため孫の為義を養子とする）—為義—義朝—源頼朝…

—義重（新田氏の祖）…

…八幡太郎義家—義国—義康（足利氏の祖）—義兼—義氏—泰氏—頼氏—家時—貞氏—足利尊氏…

…尊氏（室町幕府）—義詮—義満—義持—義量

—義嗣

—義教

—義昭…

—基氏—氏満—満兼—持氏

（鎌倉管領）

足利氏と新田氏

足利氏と新田氏は、右の略系にあるように八幡太郎義家を遠祖とする同族なのだが、所有した領地が隣接することもあり、また代々の宿怨のようなものがあって歴史的には敵同士と思われるほど対立している。両氏に決定的な優劣の差がついたのは、本文でも触れたが「源頼朝が平家を倒して権力を握った際の対応」である。

足利氏は、いち早く頼朝のもとに馳せつけて服従したが、新田氏は平家に敵対して寺尾と言う城に立て籠もりながら、頼朝の力を軽く見て距離を置く態度を示した。ある説では新田氏の祖・義重に美しい娘があり頼朝が目を付けて「側室として差し出す」ように命じたけれども、義重が従わなかったために睨まれた…ことになっている。

頼朝の正室・北条政子は気の強い嫉妬深い女性として有名であり、一人の愛人は家に火を付けられていたから、そうたやすく「側室に差し出せ」とは言えなかったと思う。新田氏の不遇が女性の所為だとする説は信じ難い。群馬の方に困って置くなら別だが、それでは意味が無い。子孫である新田義貞の行動を見ても要領が悪いから、やはり対応が悪くて立ち遅れたのだと思う。

源頼朝は清和源氏の嫡流を自認している。勇名を轟かせた八幡太郎源義家の孫を父親に持つから当然のように見えるが、本文でも触れたように、義家の嫡男・義親は粗暴な性格の人物であったらしく、小国の国守として在任中に年貢を横領した罪で流罪になった。その服役先で反乱を起こして追討されてしまったのだが、義親は死なずに逃げたとする説があり、各地に「源義親」と名乗る人物が現れては抵抗運動をしていた。

源義家は止むを得ず義親の弟で検非違使（裁判官・警察官の長）をしていた義忠を後継者にして義親の遺児・為義を養育させた。ところがその義忠が警察官舎で暗殺されてしまった。現職司法高官の変死は疑惑を生み先ず人望が有った源義家の親族が疑われ何人かが無実の罪で消されている。止むを得ず、義家が孫を育て源氏の本流を継がせたのである。源頼朝は為義の孫にあたる。

この時代は白河天皇が開始した「院政」が恒常化して派閥抗争が拡大し、天皇に密着して権力を保持していた藤原氏の天下に陰りが出始め源氏と平氏を中心とした武士の世が始まる時代であるから勢力争いも絡んで怪しいことが起きる。源氏に代わって桓武平氏が急速に台頭するのである。そうした中で、都に居なかったことが幸いして生き延びたのが足利、新田両氏の始祖になる源義国である。父は八幡太郎義家、母は足利荘の領主足利（藤原）基綱の娘である。後三年の役に奥州へ下る義家が足利荘に立ちよって生ませた子であるから母方の足利で育ち、父親を頼って都に出た。

「帯刀長（たちはきのおさ）」または「帯刀先生（たてわきせんじょう）」と呼ばれる東宮武官（皇太子警護の隊長）に採用され、真面目に勤務していた。或る日、騎馬で出勤途中に狭い道で右近衛大将（うこんえのたいしょう）近衛師団長（を務める藤原一族が乗った牛車と行き有った。道を明けようとしたのだが騎馬のため素早くとはいかない。向こうの取り巻き連中が主人の威光を笠に「どけどけ！」とばかり、義国側に乱暴を働き辱めた。当時の武士は藤原一族に蔑まれていたのである。義国は我慢したのだが、関東から従って来た家来はフジワラもムギワラも区別がつかない。

## 朗読劇・朗読舞劇研究生募集!!

あなたの隠れた才能をことば座に発見してみませんか

ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優及び朗読舞俳優志望者を募集しております。

研修期間は12ヶ月。演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂き、研修後は、ことば座劇団員として活動して頂きます。

### ◎募集要項

募集：朗読劇&朗読舞俳優養成コース

募集人員：6名程度（最大10名まで）

※面接及び朗読と簡単な演技表現試験有り

養成期間：1年間（入塾は随時受付しています）

指導月4回

受講料：月額30,000円（全・半納割引有り）

※詳しくは、下記ことば座事務局までお問い合わせください。

## ことば座「風の塾」生徒募集！

ことば座では、暮らしの中で自分を発見し、表現するための後押しをする教室「風の塾」を開いています。

◎絵と一行文教室（講師：兼平ちえこ 白井啓治）

◎詩を手話に舞う教室（講師：小林幸枝 白井啓治）

◎朗読教室（講師：白井啓治）

◎エッセイ教室（講師：白井啓治）

※（各教室は月二回の授業。受講費月額3,000円）

詳しくは「ことば座事務局」までお問い合わせください。

ことば座事務局 ☎0299-24-2063(担当：白井)

復讐のために右近衛大将の屋敷に火を掛けて焼いてしまった。武士の恐ろしさを示したことはないのだが、咎めを受けて足利に隠棲した。

義国が信濃守（長野県知事）の娘を妻として生まれたのが義康であり足利荘を相続して「足利氏」を名乗った。また上野介（群馬県知事）の娘に生まれたのが義重であり、新たに開発した新田荘を本拠として新田氏を称した。

このように近くではあるが、下野国と上野国に住み、父親を同じくしても母親が違い、弟ながら

本流の足利を継いだ義康と、兄でも開発地を領した新田氏では立場も考えも違ってくる。

鎌倉幕府に接近して世に出た足利氏に對抗心を燃やし続けた新田一族が、南北朝の動乱で活躍しながらも芽が出ず、足利氏に對抗して何時までも争乱を煽ぶらせていたのは先祖代々の怨念のなせる業かも知れない。

### 【風の談笑室】

六月十八日〜二十日までの三日間行われた、ことば座第二ステージ、最初の公演は、自画自賛にはなるが、成功と言える出来であったと思つ。小林さんの表現力もゆっくりと大きなものになってきた。彼女の表現スケールは、台本を読む力が増してくれば、まだまだ大きなものとなって行くだろうと思う。

ことば座も三年間の第一ステージを昨年無事卒業し、今回からは、第二ステージとして三日間連続した公演を行うことにしたのであったが、一日公演よりも矢張り余裕を持って演じることが出来たと思う。演出家としたら、せめて一週間の公演が出来たらと思うのであるが、それはもう少し先の楽しみとしてとっておく事にする。六月は、風の会の創立記念月であり、ことば座の公演に合わせて、風の会展も行われた。毎年のことであるが、打田兄と「書き物にもう少し皆さんの注目を頂きたいのだけれど、なかなか難しいね」の言葉が思わずついで出てくる。打田兄は、会報と小冊子の紹介を毎年担当して頂いているのであるが、毎年同じ言葉が漏れてしまふ。

先月号にも打田兄の日頃の談である「文章を書いて自分を表現するというのは人間だけに与えられた特権なんだから、文章を書かない、文章嫌いというのは人間を放棄します、という様なものだ」を紹介したが、今月号にもまたそれと言いたくなってしまった。しかし、こういうことは言い続けることが大切

なようで、言い続けていると必ず賛同して頂ける人が現れてくるものである。

五月号から、鈴木健兄より投稿頂いており、特別寄稿として掲載させていただいていたのであったが、今月号から特別寄稿の欄ではなく掲載させていただく事にした。勿論、編集事務局の独断なのであるが…。

ギター文化館代表の木下兄も特別寄稿を外したいところなのであるが、特別寄稿でなくすると、毎月書かされるのは敵わん、と言われそうなので、特別寄稿扱いに掲載させていただく事にする。

今回のことは座公演での、大きな収穫は、小林さんの表現スケールが大きくなってきたことに加え、ことは座特別研究生と位置付けている兼平良雄さんの、生涯学習として平家物語全段朗読制覇の第一回が順調に滑り出した事であった。勿論初日の緊張は大変なものであったが、二日目、三日目には確りと軌道修正され、平家物語を通して、兼平良雄の何を表現したいのかが、少しずつ構築出来て来た。滑り出しとしたら出来である。

石岡市にとって平家物語は、非常に意味深い歴史作品なのであるが、この全百二十段を読破しようという生涯目標には拍手を送りたい。

兼平良雄さんの第二回目の発表会は、十一月公演の時になるが、すでに早速準備に取り掛かっている。

私の渡す台本は、現代語訳などをつけないもので、自分で辞書を引きながら、朗読者自身の現代語訳を作成しなければならない。

自分で現代語訳した後、文章を全て視覚化する

絵を書き、ようやく声を出しての朗読練習となる。そのプロセスをきっちり踏まない人には、演劇としての朗読はできない。

平家物語を一方流だとか八坂流等といった語りではなく、自分流の演劇としての語り朗読に挑戦するというのは、指導していながら見上げたものだと思う。

## コーヒープレイク

### 『氷河期の忘れ形見』

菅原茂美

地球が温暖化すると、海水面の上昇・熱帯病の中緯度地帯での蔓延・大気や海水中の酸素濃度低下による種の大量絶滅など、致命的な被害をもたらす。

しかし、地球寒冷化も恐ろしく、中緯度地帯まで氷河が張り出し、一面氷原の不毛地帯と化す。

今から7万年前、アフリカを飛び出した僅か150人ほどの現全人類の祖先ホモサピエンスは、アラビヤ半島経由で世界各地に拡散。ヒマラヤ山脈の北周りで、アジア大陸中央部に進出したモンゴロイドは、地球温暖期にはシベリア奥地まで進出する。

しかし一旦寒冷期になるとシベリアは、マイナス70℃近くなり、耐えきれずバイカル湖近辺まで後退する。今の日本人はヒマラヤ山脈の南周りでやってきた南方系のモンゴロイドと、バイカル湖近辺からの北方系モンゴロイドの混血である。列島には10万人の先住縄

文人に、100万人の弥生人が一気に押し寄せてきた。その大部分を占めた北方系祖先は、厳寒のアジア北部で進化したため鼻など高かつたら、すぐ凍傷。二重目蓋も皮膚の表面積を増やし、寒さに弱い。長い足・長い指なども凍傷にかかりやすい。

更に冷たい外気を温めて肺に送るのに、鼻の粘膜の容積を増す必要がある為、頬骨が張り出し、鼻の低い平顔となる。中には「横に面長」も。氷河期の忘れ形見は雷鳥だけではない。我ら北方系モンゴロイドも同じこと。

低い鼻・一重目蓋・頬骨の張った平顔・白魚ではなくナマズのような指。ズングリタイプこそ寒冷地に適応した理想体型。クレオパトラには、ほど遠い容姿だが、御祖先を恨むでない！

さて今月は紙面に余裕があるので、普段あまり書く機会の無かったことを少し話してみたいと思う。

このふるさと「風」の会も、もともと始まりから数えると、満6年となった。その6年前にこれはもう何度も書いてはいるが「ふるさとおこし」を念頭に置いた民話塾を手伝う事となった。この塾は、本当の意味での「ふるさとおこし」を考えられる市民プロの育成を目指したのであった。

市民プロとは、実に不明瞭な存在ではあるが、作家として生活をしていくというのではないが、その視線・視点は偽物を切り捨てる力を有した人材、という意味である。

よくプロとアマの違いについて聞かれる事があ  
るが、それを聞く人の多くは、プロの技術を知  
りたいらしい。しかし、プロにとって必要な  
は技術ではない。技術は持っているにこした事  
はないが、技術は絶対条件ではない。  
ではプロとアマの違いを分ける一線とは、偽物  
を判断し、容赦なく切り捨てる力、を持ってい  
るか否かであると言える。

「力」と表現したのは、自分自身の作品に対  
しても偽物の判断と、切り捨てるを容赦なく与えな  
ければならないからである。

些か禅問答のようになるが、表現には嘘をいく  
ら言ってもかまわないが、偽(にせ)は決して言  
ってはならないのである。偽物を容赦なく切り  
捨て、大きな嘘を語る(嘘である必要はないが)、  
表現するのがプロである。

では、その偽物を判断し切り捨てる力ほどのよ  
うにして身につけるか、であるが、これは先達  
者に倣い覚えることしかない。つまり名作と呼  
ばれる作品に接し、そこに学ぶしかない。さら  
に学んだことを感性の中に取り込み、自立した  
己を構築することである。

絵の教室でも文章の教室でも、決まり文句のよ  
うに言われるのは思った事、感じたことをその  
ままに、正直に表現する事が大切である、とい  
われる。しかし、これは偽物の言葉、偽物の説  
明である。

当会の菅原兄が生物学・動物学的に人間の本质  
を考察し、毎月書いておられる様に、人間とい  
うのは本能的に自己中心的に己を優位に見せよ  
うとするものである。

特に人間関係に関しては先ず自己中心になる。

自分が絶対の一番で、二番目三番目はどうでも  
いいのである。他人への思いやりなどでもそう  
である。自分の傷つかない事、無関係の事なら  
実に道徳的で、綺麗な言葉を使う。そして自分  
自身を無意識に高見の場所に置いてしまい、そ  
の言葉や文章は実に卑猥で偽物の臭いがプン  
プンする。自分の感じた事、思った事をありのま  
まに、正直に表現するところなるのである。  
ある事象に接し、思い感じた事を表現しようと  
する時には、事象に対して自分が思い感じた中  
に、偽善的偽物はないかを見つめることである。  
その上で、自分を含め検証考察を与えることで  
ある。そして、書かねばならない(表現しなけ  
れば...)と考えることに対して、大嘘、大風呂  
敷を広げ、愉快に対峙することである。

#### 風語り

草風亭雨露

・庭の雑草の中 野良猫の死んでおる

庭の雑草が随分伸びてきて、そろそろひっこ  
抜かねばと思い、伸びきった雑草を棒つきれ  
で突ついたら、蠅の群れが飛び立った。  
野良猫の糞でもあるのかと、雑草をかき分け  
てみたら、糞どころではなく野良猫が死んで  
いたのであった。  
放置しておくわけにもいかず、生垣の根本に  
穴を掘り埋めてやった。脇に百日紅の木があ  
り、埋めた野良猫に言っちゃった。夏には真  
赤な花を咲かせろ、と。

## 工房オカリナアートJOY

母なる大地の声(音)を  
自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で・・・また大好きな雑木林に一滴み  
の土を分けてもらい、自分の風の声をふるさとの風景  
に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお  
待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465  
Tel.0299-55-4411

七月十日～二十五日まで、行方市井上の西連寺  
そばの里山で山百合まつりが行われている。  
十七日、十八日、十九日の三日間、こは座の音  
楽を担当して頂いている野口喜広さん、矢野恵子  
さんのオカリナコンサートが開かれます。  
コンサートは、午前十一時～、午後二時～の二回  
です。入場料は、山百合基金として300円。  
谷津田に響き渡るオカリナの音色は、コンサート  
ホールで聞くのとはまた違った、土と風の景の声  
を聞かせてくれます。  
一昨年、昨年と出かけてきましたが、山百合の匂  
いの漂う中で土笛の音が谷津田に響き渡るのを  
聞いていると、正しくここが常世の国と感しさせ  
てくれます。

【常世の国の恋物語百より舞歌を二つ】

『そして、あなたへ…』

そして、あなたへ

もう何度声にして告げただろうか

でも

百万遍にはまだまだとどきません

私の

あなたへの心の想いを

百万遍にしたら

そのときあなたは、私に振り向いて下さいますか

でも

あなたは私にこう言いました

もういい加減にしてください、と

私はただ笑うしかありません

笑いの心理学に言っています

笑いとは人の不幸を見たときの優越感、だと

私は私を笑っています

私を見ている私が

不幸な奴だと優越感に浸っているのです

そして、あなたへ

私は

私のことをただ笑うことしかなす術を持ちません

悲しい恋はただのピエロで

可笑しいだけ

私は私のことをただ笑うだけです

百万遍愛していますと告げる前に

私は私のことを笑っています

『天職』

私がこの世に命をもらう時

私は神から

あなたを愛することを命ぜられました。

私の与えられた天職は

あなたを愛することです。

私はあなたに逢うために随分と遠回りをしてきました。

だからあなたのそばに来るのが遅くなってしまいました。

でも私はあなたに逢うのが遅すぎたとは思っていません。

私もう少し早くにあなたに逢っていたとしても

私はあなたのことを

天職を捧げる人だとは思わなかったかも知れません。

だから遠回りしすぎて遅すぎたとは思いません。

私の天職はあなたを愛することです。

あなたがこの世に命をもらう時

あなたが神から

私を愛することを命ぜられました

あなたの与えられた天職は

私を愛することです

あなたは私に逢うために随分と遠回りをしてきました。

だから私のそばに来るのが遅くなってしまいました。

でも、

あなたは私に逢うのが遅すぎたとは思ってはいません。

あなたがもう少し早くに私に逢っていたとしても

あなたは私のことを

天職を捧げる人だとは思わなかったかも知れません。

だから

遠回りしすぎて

遅くなりすぎたとは思ってはいません。

あなたの天職は私を愛することです。

私はあなたです。

そして、あなたは私です。

編集後記

風の会のHPが、木村さんの応援で少し新しくなりました。その所為か、HPへの来訪者が急増えたようです。大変嬉しいことです。昨年に続き、今年も各地でゲリラ豪雨に襲われています。早く物質の贅沢から精神の贅沢への転換がはかられないと、人類は本当に滅びてしまうかもしれません。心配性かな…。

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com>

# 朗読舞劇団「ことば座」

ことば座は、ふるさと「常世の国」の暮らしの歴史を大切に考え、明日の希望の物語を朗読舞に表現する劇団です。

朗読舞は、ふるさと「常世の国」に生まれた全く新しい舞台表現です。

朗読を「手話を基軸とした舞い」に演じる小林幸枝は、世界でただ一人、朗読を手話に舞う女優です。

**ことば座は、ギター文化館を発信拠点として  
朗読舞「常世の国の恋物語百」に挑戦しています。**

**第19回定期公演は、11月12、13、14日です。**

「ことば(言葉)」とは、「心を口に繁らす」ことをいいますが、心とは真実、口は表現の手段、葉は紡ぐことをいいます。「ことば座」は、この言葉の原義に基づいて、物語に紡がれてある真実としての未来の夢を朗読と手話を基軸とした舞という二つの言語によって、自由で自在な舞台表現を創造しています。

ことば座が取組んでいる朗読舞及び朗読舞劇は、日本の古典芸能である能や人形浄瑠璃をヒントに、語り朗読を手話言語をベースにした舞技で演じるというもので、脚本：演出家の白井啓治が聾女優小林幸枝のために創案した石岡に生まれた新しい舞台表現です。

舞台衣装等のデザイン・製作に興味があり、ことば座にボランティア参加して頂ける人、

募集しております。現在舞台背景画担当として風のことば絵作家の兼平ちえこさん、

舞台装美として小林一男さんの参加を頂いております。

興味のある方、事務局の白井まで連絡下さい。

ことば座 〒315-0013 石岡市府中 5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

E-mail: shirais3maple.ocn.ne.jp